

軍用犬 Military Working Dogs

January 22, 2018

By Senior Airman Donald Hudson
374th Airlift Wing Public Affairs

横田基地と基地住民の安全と危機管理は、最優先事項だ。基地の防衛の前線では、チーム横田で最も勤勉な4本足のメンバーが活躍する。

第374憲兵中隊の軍用犬とそのハンドラーは、危険物や違法物が横田のゲートを通り抜けないよう、長時間にわたって任務にあたる。彼らはまた、定期的な巡回パトロール、周辺の警戒、ランダムな対テロ対策のほか、公開実演も行っている。

横田の軍用犬チームの専門分野はさまざま。麻薬、爆薬の探知など、それぞれの専門があるが、全ての犬が、必要時に捜査に出動し、容疑者を逮捕できるパトロール犬である。

第374憲兵中隊軍用犬ハンドラーのマリオ・ヘルナンデス上級空兵は、軍用大部隊の新人だ。最初のパートナーとなったのは、8歳のベテラン軍用犬の「デモ」である。

ヘルナンデス上級空兵は、軍用犬たちが働く上でのハードルは、気温、風量、湿気などの環境要因のほか、ハンドラーとの関係だと話す。

「それぞれの犬が個性を持っている。犬の信用を得られなかったら、共に仕事をするのが難しくなる」とヘルナンデス上級空兵は言う。

ヘルナンデス上級空兵とデモは、一緒に働き始めてまだ一ヶ月。ハンドラーと軍用犬が完全に互いを信頼し合い、共に働けるレベルに達するまで数ヶ月の期間がかかると言う。

「単に人と犬を組み合わせても、すぐによいチームになるとは限らない。軍用犬はパートナーのことを知らなくてはならず、そのためには、犬のことをよく知るため、共に時間を過ごさなくてはならない。信頼とチームワークを築くために、毎日、共に遊び、働き、彼らのそばにいてあげなくてはならない」とヘルナンデス上級空兵は話す。

ヘルナンデス上級空兵とデモは、完全に任務態勢が整ったチームとなるまで、もう少しの時間と訓練を積まなくてはならない。一方、コーディー・ニッケル上級空兵とトパは、これまでに半年以上のあいだ共に働き、ほぼどんな状況にも対応できる態勢が整っている。

ニッケル上級空兵とトパは、横田基地のゲートを通る車両の捜査を行う。基地のゲートで働く軍用犬は、爆発物に使用される科学物質や禁止物を探知し、発見したらハンドラーに知らせる訓練を受けている。ニッケル上級空兵にとって、長時間働く上での試練の一つは、互いのやる気を維持することだ。

「トパがやる気を失い始めた時には、彼に元気を与え、捜査の仕事を務められるように奮い立たせなければならない。また、ある時には、彼が私のやる気を上げてくれる側に立つ。トパとは、互いをケアし合い、よいチームを築いている」とニッケル上級空兵は言う。全ての軍用犬とハンドラーは、実際の現場で違法物質を正確に探知できるよう、毎週、訓練を行っている。

また、一人のハンドラーがその基地に駐留するあいだ、一頭の軍用犬と専属のチームとなり、一番の親友となる。「軍用犬のハンドラーになって良かったと思えるのは、毎日、一番の親友と一緒に仕事ができることだ。苦難に直面しても、自分は独りでないと思うことができ、常に自分のためにそこにいてくれる忠実な友を持っている。それが「トパ」だ」とニッケル上級空兵は言う。

トパは、6歳のベルジャン・マリノアで、耳の上半分、尾の先端、また幾つもの歯が欠けている。トパは、過去にもいろんな闘争に立ち向かってきた。手を出すのが難しいとされる犬だが、ニッケル上級空兵にとっては、トパ以上によいパートナーはいないと言う。

横田が太平洋空軍の主要な戦力展開の拠点であるために、基地とその資産が守られていなくてはならない。幸いチーム横田は、有能な第374憲兵中隊と軍用犬チームの力によって守られている。



1月11日、多摩ヒルズレクリエーション施設で実施した軍用犬の人物捜査定期訓練で、成果をあげた軍用犬の「デモ」を褒める第374憲兵中隊軍用犬ハンドラーのマリオ・ヘルナンデス上級空兵。

ヘルナンデス上級空兵は、新人の軍用犬ハンドラーで最初にパートナーとなった犬がデモ。チームを組んで一ヶ月。まだ共に働くことに慣れる段階にある。



1月18日、横田基地で車両の爆発物・禁止物を捜査する第374憲兵中隊のコーディー・ニッケル上級空兵と軍用犬トパ。横田の全ての軍用犬とハンドラーは、実際の現場で正確に違法物質を探知し適切に対応できるよう、毎週訓練を行っている。